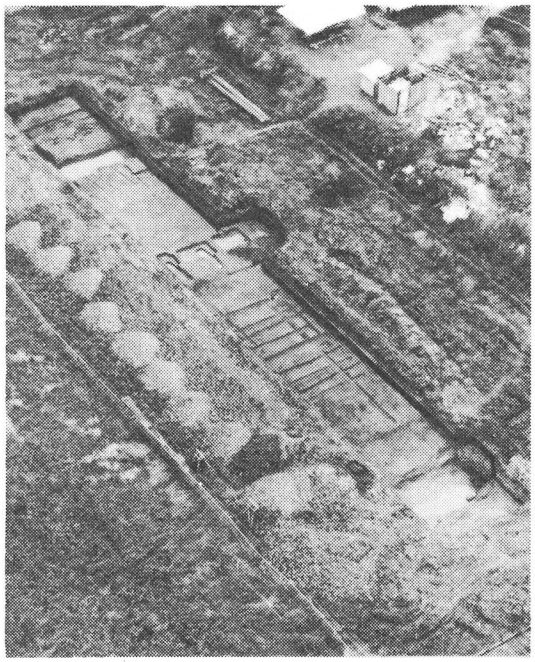
藤原宮南面大垣の調査（第29－６次ほか）

（昭和55年３月～昭和55年10月）

この調査は藤原宮の南西部にある飛弾町に建設される体育館，隣保館および建設予定地への仮進入路等の工事に先立って実施したものである。調査次数は体育館予定地を第29－１次，隣保館予定地を第29－５次，進入路を第29－６・７次調査とした。一連の調査地は，藤原宮南西部から藤原京右京七条二坊にまたがる地域にあたるので，ここでは宮域の調査結果から述べることにする。

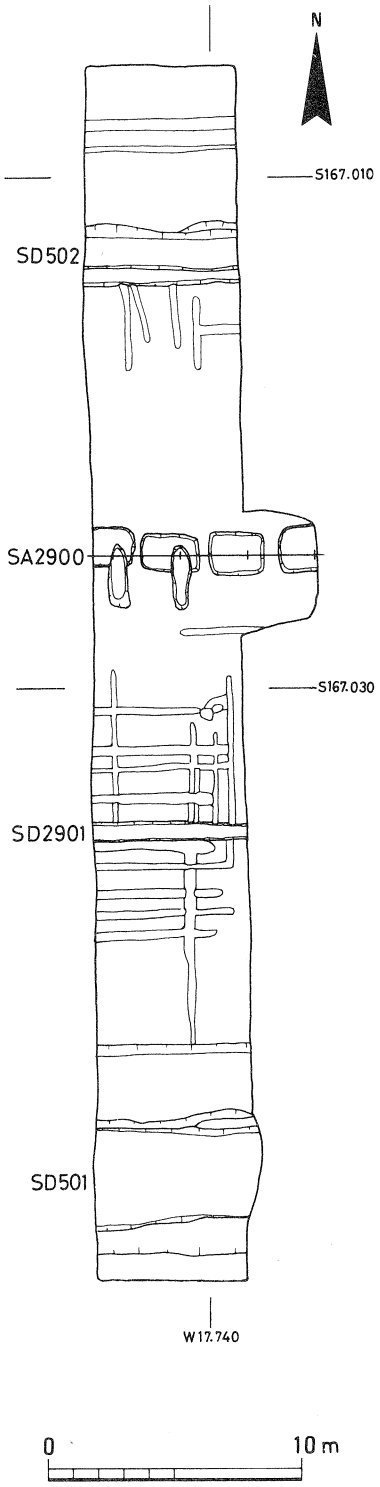
第29－６次調査　調査地は南面西門推定地の西約60ｍにあり，先年，南面内濠を検出した第19－２次調査地に西接している。調査は，南面大垣，内濠，外濠の検出を目的とし，南北48ｍ，東西６ｍの調査区を設定した。調査区の層序は上から耕土，床土，灰褐色砂質土，黄灰褐色粘質土，黒褐色土，灰色粘土の順である。藤原宮期の遺構は調査区北半では黄灰褐色粘質土層の上面で検出したが，調査区南半ではその層がなく，下層にあたる黒褐色土層の上面で検出したものもある。なお，黒褐色土層は弥生式土器（畿内第Ｖ様式）の包含層である。



調査地全景（南西から）

調査の結果，所期の目的通り藤原宮南面大垣ＳＡ 2900は，内濠ＳＤ 502外濠ＳＤ 501と東西溝ＳＤ 2901を検出した。

南面大垣ＳＡ 2900は，東西方向の掘立柱塀で３間分ある。柱掘形は方形で，南北約 1.5ｍ，東西約 2.0ｍ，深さは約 0.8ｍである。柱は南方へ抜き取られている。柱間寸法は，約2.66ｍ（９尺）等間であり，東面大



第29－6次調査遺構配置図（1：300）

垣の柱間寸法と一致する。

内濠SD 502は，大垣の北約12mにある素掘りの東西溝で，幅約2.5m，深さ0.65mの規模である。断面形はU字形を呈し，堆積土は3層に分かれる。最上層の第1層からは多量の瓦が出土したが，第2・第3層からの遺物の出土は少ない。

外濠SD 501は，大垣の南約25mにある素掘りの東西溝で，幅約6.0m，深さ1.3mの規模である。断面形は逆台形状を呈し，堆積土は5層に分かれる。遺物は最上層の第1層から第5層に至るまで，瓦，土器が含まれていた。このほか，第3層からスッポン，第4層から木簡6点，人形1点，犬・馬骨が出土した。

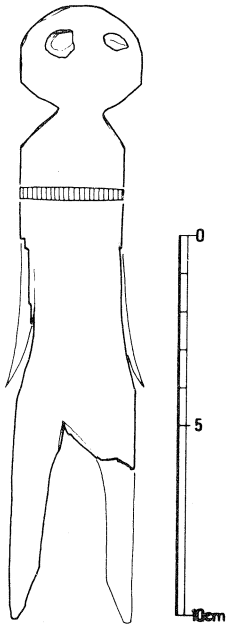
東西溝SD 2901は，大垣の南11mにある素掘り溝である。幅約0.7m，深さ0.25mで，東面大垣の東方にあるSD 2295，および北面大垣北方のSD 144（奈良県教育委員会編『藤原宮』昭和44年）と同じく，宮の四周をめぐる溝と考えられる。

遺物には木簡，木製品，瓦，土器，動・植物遺存体があり，主に内濠，外濠から出土した。木簡は外濠から6点出土しているが，その中には大宝令あるいは浄御原令の篇名の一つである「考仕令」と記された断片があり，注目される。

木製品では外濠から出土した人形がある。長さ16.2㎝，幅3.7㎝，厚さ0.4㎝である。頭部は円形にかたどり，顔面は両眼を抉り込んで表

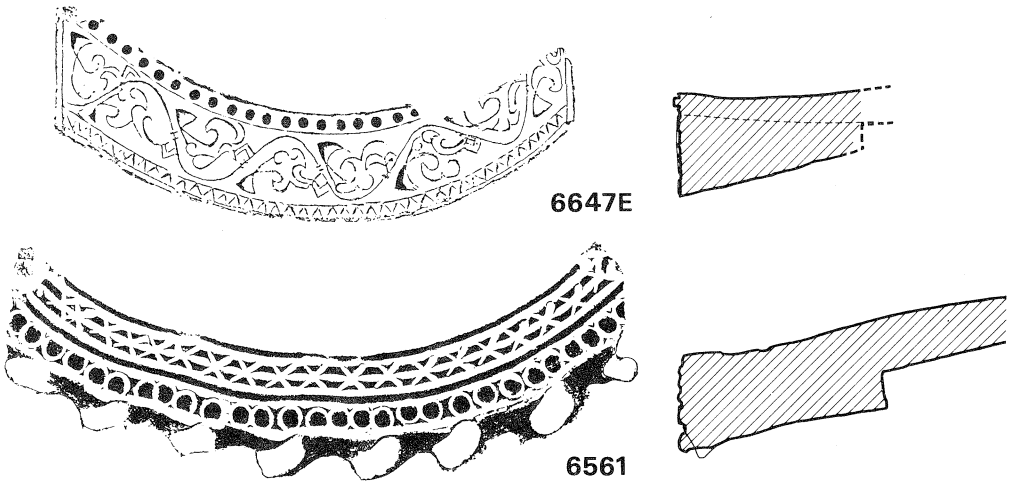
現するだけで，墨描きはない。

瓦には軒丸瓦，軒平瓦，面戸瓦，熨斗瓦，丸瓦，平瓦などがある。軒瓦は総数36点で，そのうち内濠から８点，外濠から13点出土した。軒丸瓦は外濠から6278Ｂ型式が２点出土したのみである。軒平瓦は９型式34点あり，そのうち４型式８点は内濠，７型式11点は外濠からの出土である。型式では，内濠からは6561型式，外濠からは6646Ｂ・6647Ｅ型式が目立つ。面戸瓦・熨斗瓦などの道具瓦は外濠から多く出土している。



外濠出土人形

今回の調査では，藤原宮南面大垣・内濠・外濠を同時に検出することができた。宮の南面外郭については，第１次調査で南面中門と内濠，外濠が明らかになっている。南面中門心と内濠・外濠間の心々距離を求めると，各々11.5ｍ，20.3ｍの数値が得られる。一方，今調査地では，南面大垣と内濠間が11.65ｍ，外濠間が24.75ｍとなる。第１次調査の成果と比べて，大垣と内濠間の距離には大差ないが，外濠とでは，今回の調査区の方が約4.5ｍ広くなっていることがわかる。従って，第１次調査区と今回の調査区を結び，大垣・内濠・外濠の振れを求めると，大垣・内濠が方眼方位に対し，西で約46″南に偏しているのに



軒平瓦実測図（１：４）

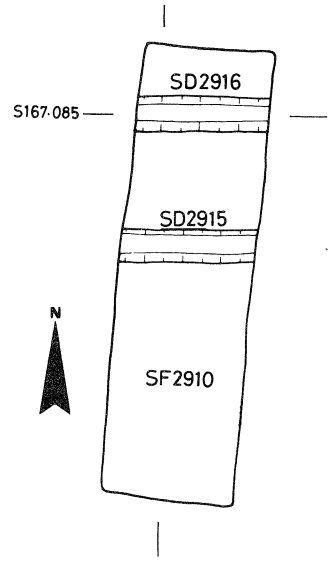
対し，外濠は，1° 37′ 57″偏することになる。南面大垣と外濠間の距離が南面中門以西で徐々に広がっていくのか，或いは，その広がりが宮の南西隅に近い当地域だけの現象であるのかの解明については今後の調査を待ちたい。

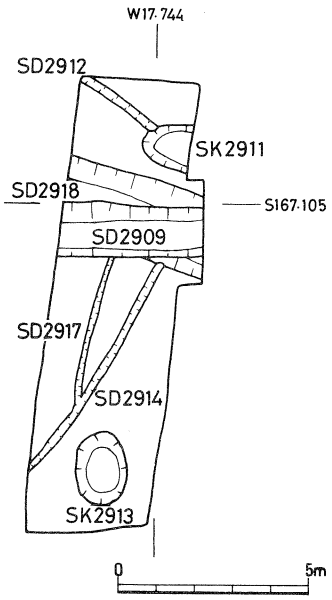
第29－7次調査　この調査は，六条大路の検出を目的とし，第29－6次調査区の南約35mと55mの地点に各々東西幅3mの調査区を設定した。南区は南北12m，北区は南北10mである。調査区の層序は両調査区とも表土，耕土，暗褐色土の順になり，暗褐色土層は弥生式土器包含層である。遺構はこの暗褐色土層の上面で検出した。

南区の遺構には，藤原宮期の東西溝SD2909と弥生時代の溝SD2912・2914・2917・2918，土壙SK2911・2913，それに中世の小溝がある。藤原宮期のSD2909は幅1.6m，深さ0.2mの素掘りの溝である。堆積土は2層に分かれ，上層から土師器，須恵器が少量出土した。弥生時代の遺構のうち，溝SD2918は藤原宮期の溝SD2909の下にあり，幅2.1m，深さ1.2mの斜行溝である。土壙SK2913からは畿内第Ⅲ様式，そのほかの遺構からは畿内第Ⅴ様式の弥生式土器が出土した。

北区の遺構には藤原宮期の溝SD2915・2916がある。SD2915は幅0.8m，深さ0.2m，SD2916は幅0.85m，深さ0.2mである。両溝からはともに藤原宮期の土器が少量出土した。

今回の調査で検出した3条の東西溝のうち，南区にあるSD2909を，その位置からみて六条大路（SF2910）の南側溝とすることはほぼ誤





第29－7次調査遺構配置図（1：200

りないものと思われる。一方，北側溝については，その想定位置付近にほぼ同規模のSD 2915・2916があり，いずれとも判断がつきかねる。南側溝SD 2909とSD 2915・SD 2916との心々距離はそれぞれ17.3 m，20.8 mとなる。六条大路の幅員については，市道拡幅工事に伴う工事区の壁面調査によって，側溝心々距離で約20mの数値が得られている。（第21－2次調査，概報8）。その数値を考慮すれば，SD 2916を北側溝とすることもできる。しかし，SD 2916とSD 2915の関係を六条大路幅員の拡大，縮小の結果と考えることもできるので，六条大路の北側溝の確定は今後の問題としたい。仮に六条大路北側溝をSD 2916とすると，大垣と六条大路間の心々距離は70.8 m，SD 2915とすると72.55mとなる。また南外濠から六条大路までの壇地はSD 2916を北側溝とすると南北幅約32m，SD 2915を北側溝とすると約36mとなる。

第29－1・5次調査　この調査は，六条大路と西二坊坊間路との交差点及び右京七条二坊北西坪内の遺構を明らかにすることを目的とした。調査地は第29－7次調査南区の西方約50mの場所である。調査は2次にわたるが，調査区は東西に接しており，西区（第29－1次）が東西15m，南北32m，東区（第29－5次）が東西35m，南北23mの範囲である。

調査区の層序は上から耕土，床土，灰褐色粘質土，茶褐色砂，赤褐色土，暗灰色粘土，暗青灰色粘土，灰色粘土となり，地表下1.15mにある灰色粘土層は弥生式土器の包含層である。

調査の結果，藤原宮期の遺構としては，灰色粘土層の上面で土壙SK 2905を検出したのみである。SK 2905は調査区の南端にあり，一部調査区外に広がる。東西1.8 m，南北1.5 m以上，深さ0.4 mの規模である。このほかに，暗灰色粘土層の上面で，東西・南北方向の小溝を検出したが，いずれも中世以降のものと考えられる。

この調査地では，藤原宮期の遺構は土壙のみであった。当初予測された西二坊坊間路は遺存していない。土層の堆積状況からみて，藤原宮期の遺構は，飛鳥川の氾濫等により，削平されたものと判断される。なお，六条大路については，第29－7次調査結果から，調査区の北方にあることが判明している。